



辰巳会全国大会名簿

昭和六十一年五月二十二日(木)  
於・家寺泉涌寺、妙應殿(京都市東山)

(北海道)

山口義雄

石川幹恵

(東京)

四國

小松豊秀

間室太郎

吉

三郎

喜三郎

小

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

木

奥

村

野

田

山

奥

桂

速水社長が挨拶された。

「辰巳会に出るのは初めてです。

辰巳会のことは岳父永井よりも高令にも拘らず、元気でお聞かされておりました。先輩の皆さんが高令にも拘らず、元気でおられるることは大変喜ばしく思いました。これからも健康で辰巳会並びに日商岩井の発展にご協力をお願いします」

お人柄を偲ばせる静かな話しうりに一同耳を傾ける。

料理は当店自慢のビフテキとステーキ、大徳利の日本酒とビール、ジユースが卓上に配られ、差しつ差されつの食事となる。

時とともにムードが和いで話し声も賑やかとなり、酒のおしゃくを差しに廻つたりして席も乱れる。

霧氷が盛り上がった宴半ばに長寿番付が回覧されてくる。本日の出席者男子二十九名であるが、八十才以上が二十名、内二名（広野、宮本さん）は九十才以上といふ次第。長寿国、経済大国日本の姿を実感する。

食事が一段落したところで、加藤福雄さんのお骨折りにより神戸

製鋼所よりお借りした16ミリ映画、「鳴門大橋の建設状況」の上

映となる。技師は斎藤さん。あの

大橋がどうやって架けられるのか興味津々であった。

上映時間四十分の大作で、橋の全長一七七二米、高さ一四四メートル三二米の大長橋の建設状況が克明に写し出され感銘をうけた。

映画が終わって部屋が明るくなり、何やら皆ホッとした感じである。二時半頃解散。

尚、本日の会合に日商岩井、日本発條、豊年油、日塩、光鶴園よりご厚志を頂いたことを記してお詫と致します。

（日塩 請川記）

## 中部支部だより

昭和六十一年度

「辰巳会全国大会に思う」

ここは京都市東山 竹下富士松

三十六峯山麓に

清淨無垢の法域は

七百年の昔より

皇室ゆかりの泉涌寺

季節はまさに新緑の

肌さわやかに風香る

ただ静寂にかこまれし

妙応殿の奥座敷

年に一度の全国大会 遙々北より南より

集う同志の辰巳会

顔を揃えた百一名

平均年令八十四

覇氣衰えず矍鑠と

呵々談笑のその笑顔 見よその色艶をその瞳

語る言葉もうちとけて

兄貴と慕い弟と 呼ぶも一つの釜の飯

食つて育つたお前俺 何のへだてもあるやなし

高き誇りのヨネマーク

呼ぶも一つの釜の飯

食つて育つたお前俺 何のへだてもあるやなし

高き誇りのヨネマーク

見よその色艶をその瞳

語る言葉もうちとけて

兄貴と慕い弟と 呼ぶも一つの釜の飯

食つて育つたお前俺 何のへだてもあるやなし

高き誇りのヨネマーク



昭和61年3月27日

東京支部春の例会 川越周辺

東京支部の春の例会は寒さも峰をこした三月二十七日に行われた。例年五月に行っていたが、今回は観梅ということで早目に行つたものである。当日は前日とうてかわった珍しい程の晴天で、気温も暖かく絶好の行楽日和であつた。

定刻九時丸ビル前を出発。バスはゆつたりした新型車である。ただ参加者は西川支部長が体の不調で、又斎藤幹事も風邪で大事をとつて欠席、その他近親者の不幸や急病で欠席者が増え、参加者が二十二人に減つたのは、寂しかつた。

バスは都内を抜けて関越道に向うが、生憎渋滞甚だしく、関越道に入るまでに一時間二十分を要してしまった。車中石田、安東両幹事より本日の企画の経緯と、行先の川越と、いも懷石についての説明や、東京支部の行事内容について話があつた。

バスの時間が大巾に遅れたた

されど浮世は厳しくて

六百余名の会員も

大会毎に五人欠け

七人欠けて哀愁の

年は流れて消えてゆく

あゝ人生の笠小舟

末はいづこの岸につく

昔は昔 今は今

あしたは明日の風が吹く何はともあれ浮世を忘れみ堂かこみつうちくつろいで今日は飲もうヨサア乾杯だ

大先輩の音頭で

声さわやかに捧げる盃に

緑がうつる若葉がもえる

## 東京支部春季旅行記

三芳SAで少憩の後、鶴ヶ島I

Cを出、今日の食事処「いも膳」

に着いたのは十一時半であった。

東山辺の深緑

松の木蔭の御堂の中に

座して楊貴妃観音像は

生きるが如くおわします

緑の風が頬にしむ

